第１部：2004 年６月12日（土）９：00～18：00　於 江陵・現代鏡浦台ホテル

４世紀の日韓関係史をめぐって

金泰植　第１分科座談会を開催いたします。

我々第１分科で韓国側３名と日本側３名の６名が出会い、２年間共同研究を行い、日本の研究者と日本文化に対し多くのことを学びました。これは、私にとって大変肯定的な経験でありました。そして、今後もこのような交流がより長く続くことを期待します。これまで私が担当した４世紀日韓関係史研究を進展させるためには、相互認識上の共通点と相違点を確認することが必要であり、それが今回の座談会の課題だと考えます。

私が確認したい三つの主題を申し上げますと、まず第一が、神功紀 49 年条の七国平定記事の理解、第二が、広開土王陵碑文所載の倭軍の性格、そして第三が、４世紀の韓日関係の基本的性格です。

第一に、神功紀49 年条の七国平定記事は大部分の学者がその信憑性を高く評価しませんが、その内容を100%否定しているとも言えません。大多数の雰囲気がこのように流れているので、単に編年または内容の一部分のみ否定して、その内容の全般的な趨勢は信じながら、神功紀 49 年条自体は信じることは難しいと述べているか、もしくは、倭軍の朝鮮半島比自㶱等、加耶七国平定という記事の本質自体を否定しているのか、それを確認したいです。そして神功紀 49 年条に続く 52 年条の七枝刀がこの問題に対する傍証資料になるとお考えになるのか、その可否についても各自の認識の違いを確認したいと思います。ただ、ここで 49 年条七国平定記事の後に続く百済の南下による比利など４国の降伏記事に対する信憑性可否に対しては論外としてください。

第二に、広開土王碑文に現れる倭軍の性格をどのように見ることが可能かという問題です。甚だしく偏った見解では、これを任那日本府の駐屯軍としてみる見解もあり、あるいは、全く正反対となる立場から九州にある百済系統分国から故国のために動員された軍に過ぎないと見る見解もあります。しかし、このような偏った立場を止揚し、合理的な立場から見る時、これをどのように分析できるのかという問題です。高句麗が倭軍の存在によって、倭が百済や新羅を臣民として考えていたと分析するほどに、倭軍が独自に朝鮮半島南部を往来しつつ、百済や新羅に対し強圧的な影響力を及ぼしていた占領軍であるのか。または、朝鮮半島の南部の占領を望みつつ未だこれを完遂できない作戦中の軍隊であったのか。でなければ百済や加耶との友好的交流の延長線上から、ある代価を受ける、ないしは代価を期待して犠牲的に助けた援軍であったのか？　私が今までの論旨から整理したところでは、濱田先生の意見が前者と考えられ、私が考えているのが後者に近いと思います。では、その中間的性格であれば、どちら側に近いと認定できるのかという点を議論できれば、と思います。

第三に、４世紀のすべての記録、文献記録並びに考古学的資料を網羅したとき、４世紀日韓関係の基本的性格は何であるのか、それは倭が優位にある日韓交流であったのか？　あるいは朝鮮半島が優位にある日韓交流であったのか？　もし、そうであったとすると、その主体は朝鮮半島のどの国であったのか？　あるいはそのどちらとも認定できない、どこまでも対等な相互関係であったのかということを考えてみたいです。

この問題は４世紀の朝鮮半島情勢と日本列島の内部情勢をどのように認識しているかによって影響を受けることになります。４世紀の朝鮮半島で高句麗と百済は、すでに中央集権的古代国家を形成した勢力であり、新羅と加耶は、基本的に小国連盟体でありながら、中心勢力が現れ中央集権的な国家体制を模索していた勢力であります。４世紀日本列島の内部構造は基本的に新羅や加耶と類似し、その連合の規模は彼らより大きかったと考えられます。そして最後に、４世紀と５～６世紀日韓関係史の違いはどこにあるのかという点ももう少し考える必要のある問題だと言えます。

私が申し上げたこの三つの問題が、すべてを一度に論じることが難しい問題であることはよく分かっています。しかし、我々日韓歴史共同研究員会が将来韓国と日本の友好関係に寄与できるように前進的に考える点から、合理的に忌憚ない座談会ができればと考えています。

私たちはこれまで多くの内容を発表し討論を行い、内容もある程度は整理され、前回の中間発表がなされたと思います。ところが、それらの討論内容は一般公開されませんので、私たちの意見が相互にどのように違うのか、あるいは同じなのかを確認できる方法は、今回の座談会以外にないと考えます。そこで今回の座談会では、前回一度論議されたとしても、もう少し要約した形で共通点と相違点を確認しましょう。今回の座談会につきましては、その形式上から見ましても研究をすべて終え論文も整理された状態で書いたという想定となっておりますので、どの先生方もこの短時間の座談会を通じて論文を大きく修正することはないと考えます。しかし、たとえそうだとしましても、私たちが現在しなければならないことは、私たち６名の認識がどのような共通点と相違点、どの程度のスペクトルを持っているのかを確認することであり、それが今回の座談会の課題ではないかと考えます。

濱田　４世紀の日本と韓国の関係史をどのように再構成するかというのが大きな関心事です。大学における今年の私の講義は、日本と韓国の関係がどういうことから始まり進展したかということを長い目で把握したいというのが狙いで「古代の日韓関係史」を掲げております。この共同研究会の成果をどう出すかということも暗に意識しながら準備しておりました。ある部分はオーソドックスな古代日韓関係史のとらえ方で、古朝鮮、箕子・衛氏の朝鮮から始まり、楽浪郡・玄菟郡・帯方郡の問題から倭人の登場を考えておりますが、それは『日本書紀』の神功皇后紀あたりに出てくる古代の日韓関係史の事柄をどう理解するかということと関係します。

戦後の日本歴史学界の「古代日韓関係史を考える」という研究分野では、魏志倭人伝の卑弥呼の問題もそうですが、七支刀や広開土王陵碑文を科学的に拓本あるいは現地調査等を踏まえて研究するというように、まずは『日本書紀』を離れ、中国史料や金石文、韓国史料などを通して古代の日本史・日韓関係史を考える方向にあると思います。もちろん中には考古学の豊かな研究ということもあるわけですが、残念ながら私は考古学者ではありませんので、そちら側から古代日朝と日韓関係史を再構成するというのは十分にできません。

そこで私は、中国史料の「楽浪海中倭人有り」という『漢書』地理志の部分から説き起こしております。３世紀前半、南にもう一つ帯方郡が設置され、倭人が帯方郡へ出掛ける積極性が出てきたというところから、倭人の東アジアにおける登場というのが活発化したと考えております。

一方では、高句麗が玄菟郡・楽浪郡・帯方郡に対する攻撃を活発化いたしました。高句麗族・

加羅族・倭人に対する郡県支配、個別人身支配という中国の伝統的な中央集権的な支配は、狩猟を主とした高句麗族には合わず、非常に抵抗を受けます。ところが南の加羅族の農耕社会には、強い抵抗を受けるというよりも、むしろその文化や技術は熱心に吸収されていただろうと思います。ですから、313 年から４世紀前半に高句麗族が楽浪・帯方郡を撤退させたことは、その後の日韓関係を非常に強くする出来事だったと考えております。

楽浪郡・帯方郡が撤収された後、加羅族の中では統合が進化し、馬韓の方から百済が、やや遅れて辰韓の方から新羅が登場するという、東アジアにおける韓半島を中心に倭人を巻き込んだ大きな政治変動が進んでまいります。そういう過程の中で、百済の王が倭王に七支刀を贈り、その後百済と倭との密接な関係のもとで高句麗の広開土王との激しい戦闘が展開するという、４世紀後半から５世紀全般にわたる、いわば東アジア動乱の一世紀が開始されるというように理解しております。そういう過程を経て５世紀の倭の五王の時代になり、百済においても倭においても中央集権的な古代国家が大きく伸展したと考えております。

私は今後、古代の国家形成過程の中で対外関係が国家形成にどう影響してくるかという視点から、4 世紀という時代、中でも日韓関係をどうとらえるかを考えたいのです。対外関係を考える場合、従来は近現代の対外関係の理解の仕方がどうしても入らざるを得ないという欠陥が見られます。「軍事的に支配した」「占領した」「従属」という表現を使ってきたことがあります。しかし、現在の目から古代の国の上下関係や主従関係を描き出すということには、果たして実態はそうなのかという疑問があります。もっと違った理解と表現方法はないものでしょうか。

そこで注目するのは、交流の多様性です。もちろん軍事的・紛争記事などは重要な記録ではありますが、その他の交流も大きく発掘することによって全体的としての古代の日韓関係を再構成したいというのが私の課題であります。

金泰植　濱田先生から追加の話題提供がありましたが、これは将来の研究方向と今までの研究の基本方針をお示しになったのだと思います。その中で、神功紀の記事が国際社会に倭人が登場することと関連があり、また七枝刀を通じ４世紀に百済と倭が結びついたとお話しになりましたが、これは「神功紀 49 年条や 52 年条を受け入れる」という見解ではないかと思います。

ところが、これは別の部分で『日本書紀』から離れて中国史料や金石文を通じ構想したい」と話されたこととは相反します。神功紀を離れたとおっしゃりながらも、やはり七枝刀と神功紀を利用されたという感じを受けるのですが、史料としての神功紀の価値に対してどのようなお考えなのか、もう一度明確にお話しいただきたいと思います。

佐藤　私は金泰植先生と濱田先生の話をお聞きし、４世紀の日韓史を考える上で三つの問題点を感じました。

一つは概念の問題です。これは３世紀・４世紀・５世紀に共通すると思いますけれども、例えば金泰植先生は「4 世紀の高句麗・百済で中央集権的な古代国家ができていた」と見ておられ、濱田先生は「３世紀・４世紀の韓半島の諸国あるいは倭の諸国は国家形成過程である」と見ておられました。日本における古代史考古学の研究でも、古代国家はどの時点で確立したのかということについてはさまざまな意見があり、決して統一された見解はありません。私が高校生のころには、４世紀末の広開土王陵碑に「倭が朝鮮半島に軍隊を出している」と書かれて

いることから、４世紀後半には日本に中央集権的な国家が確立していたというふうに見ていました。しかし今では、「３世紀の前方後円墳体制が日本列島に形成される過程で古代国家、前方後円墳国家が形成された」とする見方、「５世紀の大王陵に見られるような権力の集中の在り方を見て、５世紀に古代国家が形成された」とする見方、「７世紀に律令国家が形成された」とする見方があります。これを七五三論争と呼ぶ人がおりますけれども、日本の古代史・考古学の世界でも国家をどう見るかによってさまざまな見解があります。

概念に関することでは軍事的支配の問題もあります。金泰植先生の話題提供の中でも、占領軍なのか、作戦中の軍隊なのか、援軍なのか、あるいはその中間的な性格なのかというお話がありました。どういう段階・レベルのものかを調べるために同じ一つのことをそれぞれ違う概念で話をしていると、共通の土俵でお話ができなくなります。ですから今後は、日本・韓国間だけではなく日本国内でも研究者同士でできるだけ概念を共通のものにしていく努力をするべきだと感じました。

第二は史料批判の問題です。特に『日本書紀』の史料批判ですが、中国史料、あるいは広開土王陵碑や七枝刀の銘文のような金石文と対応させながら『日本書紀』を批判的に読み直していこうということだと思いますけれども、それでも関係する別の史料がない場合に『日本書紀』をどうとらえるかというのが金泰植先生のご指摘だと思いました。この『日本書紀』にしかない史料の場合にも、確実に言えるのは８世紀前半の日本古代国家ではそう考えられていたということなのですが、記事が全くの神話伝承なのか、あるいはその背景に何かがあるからそういう史料ができているのかなど、さまざまなレベルがあると思います。これも先ほどの概念と同じように、研究者が一つずつ客観的な根拠を示しながら自分の立場を提示していくほかないと思います。

三番目は、東アジアの４世紀の国際関係を立体的・多元的に見なくてはならないということです。濱田先生が言われたように、その時代の日韓関係を「倭と百済」「倭と高句麗」「倭と新羅」という二国間関係だけで見ていては、東アジアの国際関係は解けません。中国との関係を含め、朝鮮半島の諸国相互の関係、倭との関係といったものを全体的に見ていく必要があると思いました。以上の三点を私は課題だと考えました。

倭の統一時期について

盧重国　４世紀に限定して見た場合、神功紀七国平定記事が問題です。単純に考えてみましても、369年に倭が加耶七国を平定するためには、前提として４世紀中ごろから後半に倭自体がいったん統合していなければならないと思います。『宋書』倭国伝によると、５世紀、430年代から460年代に倭が統一したと記録されています。これは上表文に書かれておりますので、その当時の倭王室の公式的な立場だと見ることができます。したがって、４世紀中後半ではまだ統合されていない倭が、海を渡って加耶七国を平定したとは信じられません。ですから、ここで日本側委員のお考えをお聞きしたいのです。

佐藤　考古学者の中には３世紀の前方後円墳体制が全国に行きわたった段階をもって古代国家の形成と見る説もありまして、私はこういう意見ではないのですが、４世紀においてもすでに日本列島の中で古代国家あるいは強力な王権ができていたという見方もあります。

石井　盧先生のお話の基本にあるのは、『宋書』倭国伝の記事の「昔より祖禰躬(自)ら甲冑をつらぬき」の「祖禰」の解釈だと思うのです。祖禰が盧先生のお考えのように祖父ということでよいのか、それとも先祖という考え方なのか。祖先であれば、この記事で統一過程を記述しているのはもっと前のことになりますから、「『宋書』倭国伝の記事をもって倭国の統一というのは5世紀の前半になってからだ。したがって神功皇后紀の369年というのは時代が合わない」という論議は成り立たないのではないかという感じを受けます。

盧重国　祖禰というのは基本的に中国側の表現であり、祖は祖父、禰は父となります。私は最近、淵蓋蘇文の二番目の息子である泉男産の碑文、7世紀に作られた泉男産墓誌銘を検討してみました。これを見ると、高祖、曽祖の次ですから、祖父は「祖」、父は「禰」と表現されています。高、曽、祖、禰で、禰は父です。ですから『宋書』倭伝の祖禰は「祖父と父」であることは明らかだと思います。倭王武の祖父と父と見ると、5世紀前半から後半にわたる時期と確定することも可能だと思います。

『日本書紀』の史料批判について

濱田　金泰植先生は私が神功皇后紀49年条をそのまま信用していると思っておられるようですが、そうではありません。『日本書紀』は30～40年の編纂過程があり720年に完成したわけですが、その時点でそこには律令官僚が日本の古代国家をどのように組み立てるかという歴史観が入っていると思いますし、現実の歴史の記録というのもあるわけです。『日本書紀』の韓国関係記事を理解するためには、そういうところからとらえていかなければならないと思います。先生は「本質を否定するものか確認したい」「100%を否定するものとは見ていない、あいまいな意見もあるということなのでどちらかを確認したい」ということのようですが、この席で『日本書紀』のある部分を100%虚構なのか、あるいは真実も含まれているのかということは確認できないと考えます。神功皇后紀49年というのは西暦249年ですが、暦を120年間下げて369年となるというように、『日本書紀』の編年の問題からしてそうなのです。

そこで私は、『日本書紀』の編纂過程を踏まえながら、『日本書紀』の中において神功皇后紀49年条がどういう位置づけにあるかというのを明らかにした上で、この記事をどう解釈するかという視覚でこれに臨んでいます。神功皇后紀49年条が古代の日韓関係の最初の記事だということから見ても、潤色はあると思います。また『日本書紀』は、中国の歴史書にならって「日本書の紀」という説があるように、中国正史の対外関係の記録用語を使っておりますので、そこにも実態と離れたものがあるに違いないと私は見ております。ですから、全体を見ながら個別を批評・批判するということが必要だと思います。

金泰植　これまでお話ししたことを少し整理してみます。私は発題文で、「神功紀49年条の七国平定記事の信憑性については大部分の学者が高く評価していない」としましたが、佐藤先生、石井先生、濱田先生のお話では、高く評価しないとのお話もなさらず、むしろ傍証資料を参考にして「信憑性があり得る」とお話しされました。そうであるのならば、日本側の先生方は、神功紀49年条は相当に信憑性があるという見解なのでしょうか。そのように整理して次の問題へ移ってもよいでしょうか。

金鉉球　私は、言葉の文化の違いからか、濱田先生がお話と金泰植先生の質問がかみ合っていないよ

うに考えます。金泰植先生は直線的にお尋ねになり、濱田先生は、それはこういうふうに解釈しなければならない、という形で話をされています。そこで、提案を兼ねて私の考えを申し述べたいと思います。

濱田先生と金泰植先生の発題文の内容は、どちらの国が先進であったか、弱かったか、強かったかと、このような問題を提示しています。日韓の多様な交流がありますが、やはり最も重要なことは国家間の交流であり、国家間の関係がある程度明らかになってこそ多様な交流の性格が明らかになると私は考えます。国家間においてどちらが優位か強かったか弱かったかという話よりも、なぜ国家間の交流がなされ、その内容はどんなものであったのかを明らかにすることが本質であると思うのです。例を挙げますと、現在の日米関係を見ても、アメリカの言うことを日本はほとんど理由なく受け入れているため、世界中から批判があるだけではなく日本国内からも批判があることを私は知っています。しかし実際は、日本はアメリカから毎年500億ドル以上の貿易黒字を数十年間も得ています。このことからも分かりますように、実際にどの国が優位にありどの国が弱いかは一概には言えないと考えます。

それにもかかわらず、私が多様な交流に先立ち国家間の関係を明らかすべきだと考える理由は、国家間の関係を明らかにせずに別の交流の内容へ話を移行すると、『日本書紀』を土台として形成された既存の日韓関係をただ黙認する結果とならないかと憂慮するためです。実際に、過去のそのような関係を土台とした日本古代史の大きな枠組みは変わっていないと考えています。例えば、日本の歴史教科書の「倭が任那を根拠地として活躍した」という表現であるとか、大変申し訳ございませんが、中間発表で佐藤先生が「任那四県を百済が要請した」という内容を引用したことも同じと考えます。したがって、過去の『日本書紀』を土台とするこのような内容が、現在の状況ではそのまま事実であるように受け取られているという点に問題があるのです。

このような国家間の関係において柱となる最も代表的な記事が、神功紀 49 年条だと私は考えます。そういう意味で、このような基本となる史料に対してはやはり一度ここで論議してみる必要があるのではないかと思います。

例を挙げますと、49 年条に対し濱田先生は、「形成過程を考慮して解釈し、史料批判をしなければならない」というようなお話をなさいました。しかし私は、過程を考える前にまず記事自体に対する批判がなければならないと考えます。少なくとも、記事の内容について何が事実で何が成立しえないかを明らかにした後で、『日本書紀』編者の観念を除去していくべきではないかと思います。ところが、記事自体の批判を保留した状態で形成過程から話をするようなことになりますと、いわゆる「加耶七国平定」等の既存の主張がそのまま事実であるかのように受け取られていく結果となるのです。そのような面から、私はこの記事自体に対して、一度ここで論議する必要があるのではないかと考えます。

佐藤　私は、この前の中間報告会で「『日本書紀』の任那4県割譲を信じている」などとは全く言っておりません。きちんと文章を読んでいただければ分かりますが、「それ以外のさまざまな史料から分析すれば、6世紀前半に百済が朝鮮半島の南西部に進出したことの一つの表現が『日本書紀』には書いてあるのではないか」というふうに『日本書紀』を引用しただけで、『日本書紀』が正しいとは言っていません。だからといって100%『日本書紀』を否定するのかと

いうと、『日本書紀』にはそう書いてあるということは認めざるを得ません。「『日本書紀』に書いてあることをそれ以外の史料から客観的に追究するべきである」とは申し上げました。神功紀49年条についても、「確実なのは8世紀前半に日本古代国家がそう考えていたことであり、4世紀なり3世紀にそういうことがあったかどうかは、ほかの歴史史料とつき合わせて史料批判する必要がある」とは申し上げたのですが、「これを信じている」とか「100%否定する」ということは申し上げておりません。

金鉉球　私は、佐藤先生がおっしゃることは文章からもその意味を十分に理解しております。しかし、佐藤先生のおっしゃったように、否定も肯定もせず「『日本書紀』にこのように書いてある」と引用することで、読む人はそれがあたかも事実であるかのように感じてしまうのです。これは日本と韓国の文化の相違点かもしれませんが、先ほど濱田先生がおっしゃったことや、日本の教科書に広開土大王碑文を引用した表現があることを考えますと、日本の学者は肯定も否定もなくただ引用したと話しますが、第三者が見るときにはそれが事実であるかのように感じるのです。そのような面から、核心となる記事に対し、別の史料研究などで二次的に行われるべき問題を先に持ち出してきて、一次的に行われるべきその記事に対する史料批判を保留することで、逆に既存のその史料を土台として話された朝鮮半島南部経営説などが既定事実であるかのように認識されるのではないかと心配するのです。

石井　今の議論を伺い感じたことですが、金泰植先生の問題の設定の仕方は「これは信じられるのか、信じられないのか、どちらだ」というように、どちらかというとオール・オア・ナッシングだという感じを受けます。100%否定していないから信じているのだという議論の進め方ですと、なかなか先に進まないのではないかと思っています。「まずこの問題を片付けなければ次の問題へ進めない」ということになりますと、恐らく歴史の研究は不可能になってくるような気がいたします。さまざまな解釈を基に、史料批判というものを通じて総合的な判断により歴史を再現していくしかないだろうと思います。

佐藤　もし史料を100%否定するのであれば、その史料はもう使えなくなります。私は、『日本書紀』は8世紀はじめの日本における日本古代国家の立場から編纂した貴重な史料であると思っております。ただ、国家の歴史観によって修飾された言葉が含まれていますので、そういうものを批判し、どこまでが使えどこからが8世紀に修飾されたことなのかということを検討しながら史料を生かしていくことが必要なのではないでしょうか。生かしていくというのは肯定するということではなく、それが史料批判であり、史料否定の場合にはその史料はもう二度と一切使えなくなることだと私は思っているのです。

金泰植　私が少し申し上げてもよろしいですか。私は、神功紀49年条を100%信じるのか、100%否定するのかという論議のために申し上げたのではありません。「神功紀49年条のどの点に信頼性があり、どの点が信頼できないか」ということについて先生方にここで意見を聞きたかったのです。分からないからこのような質問をしたのではなく、神功紀49年条は信頼性がある側に近いか、もしくは無い側に近いかということを議論しようとしたのですが、今のように史料全体に対する原論的なお話のみを続けるのであれば、結局お答えはいただけないと受け取るしかなく、論議をこれ以上進行することは難しいと考えます。私自身が誤解を受けていたようで、残念です。

韓半島南部経営説について

金鉉球　石井先生や佐藤先生のご意見はもっともだと思いますが、誤解されている部分があるように思います。「49 年条に対する結論が出ないのでは研究が先に進まない」というふうにおっしゃいましたが、私も 49 年条のような記事に対しては結論が出ないだろうと思います。しかし、49 年条が過去の朝鮮半島南部経営を述べるときの土台になっていたことは事実であり、今でもそれを信じている人が相当いらっしゃると思います。したがって、そのような重要な記事につきましては、ともかくここで一度議論をしてみる必要があるのではないかと申し上げたのであり、ここで必ず結論が出なければならない、そうでなければ次の段階へいくことができないと述べたわけではありません。

石井　よく分かりました。そこで、あらためて一つご質問をしたいのですけれども、この神功紀49年条を根拠として、現在、南部経営説というものを唱えている研究者はいるのでしょうか。

金泰植　それは末松先生の見解ですが、それ以後に末松先生の説を覆す研究も多く出ました。ところが、それにもかかわらず、さまざまな概説書では、それを根拠とした結論のみが残っているために、結局はそれが問題の基本となっていると思います。

濱田　具体的に何でしょうか。

石井　概説書でも、今はそのような記述というものはあまり見掛けないと思うのですが。

金泰植　多く残ってはいませんが、それでも概説書または概説書の見解を再び整理した教科書のようなものを見ると、結局はそこを根拠にしたと思われる記述が相当数確認されます。それで私たちとしては、今回先生たちが概説書等の記載をどのように認識されているのかをお聞きしたかったのです。石井先生が「そのような叙述は概説書にも別に残ってない」と考えていらっしゃるということにより、先生に「現在考えていらっしゃる通説である」と認定していただけたことだけでも重要な言及だと思います。

石井　確認しておかなければいけないのは神功紀 49 年条の評価ではなく、任那経営説であるとか朝鮮半島南部経営説を、神功紀 49 年条をもって証明あるいは論じている概説書等は今ではほとんどないのではないかということなのです。

金泰植　確認したいと思います。そうすると、神功紀 49 年条に基づいてつくられた概説書はほとんど無いということですか？

石井　あるとしてもごく一部で、現在では恐らくふつうに研究している研究者による著作では無いだろうと私は思っています。もちろんきちんと調べたわけではありませんから無責任になりますので、このあと確実に私も調べてみます。逆に金先生からも、もしもそういう記述がされている論文などがありましたら、ぜひ教えていただきたいと思います。

金泰植　神功紀 49 年条に基づいて朝鮮半島南部経営を述べることはないとおっしゃいますが、それは当然です。「神功紀49年条を根拠として見るとき、朝鮮半島南部を経営した」というような叙述をしている概説書などないでしょう。ただ、任那経営であるとか朝鮮半島南部経営であるとか、このような結論的な歴史認識が見られる概説書は相当あります。その中で代表的なものについては、前回オリンピアホテルで発表した発表要旨の注釈に幾つか挙げております。

盧重国　私は日本の先生方のお話を聞き、神功紀 49 年条に対して多様な角度から史料批判をしなければならないという点には共感します。しかし、実際に作業に入る際、それぞれの史料批判も

さまざまな道筋から行うことが可能と考えますが、合一した史料批判は不可能ではないかと思います。そのような過程を通じ、結果的に、神功紀 49 年条の記事を全部信じるのか、全く否定するのか、あるいはどの線まで信じるのかと、それぞれの見解が整理できるのではないかと思います。そこで、3名の先生がこれをどのように見られるのか、あるいはどのように見たいのか、ご意見をお聞きしたかったのですが、大枠はただ史料批判をすべきだという原論的なお話でしたので、先生方のお考えは具体的にどうであるのか、いまだにそれが少し気になります。

濱田　先ほどの盧先生のお考えにも一言申しますと、やはり『日本書紀』に対する接近の度合いが日本と韓国では少し違うと感じております。我々は『日本書紀』重視の歴史像から離れて批判する立場ではありますが、取りあえずは『日本書紀』から離れて古代史を考え、また『日本書紀』を読み直すという方向にあります。『日本書紀』を全面的に否定するのではなく、どう批判的に活用するかという長い研究課題を持っているわけです。韓国の研究者は近年、金鉉球先生の仕事もありまして、あるいは日本から戻った留学生が日本古代史を研究するということで、『日本書紀』に対する研究熱が非常に高いと見ております。神功皇后49年条をはじめとして、日本による古代の韓半島南部支配説に連なるような記事を全面的に否定しますと言ってしまえば非常に楽なのですが、私はまだ史料批判の過程でありますので、これについて「49 年条をどう考えるのか」と問い詰められても責任ある答えは言えません。また、盧先生が日本史の研究者一人ひとりに「あなたはどう考えるか」と問い詰めなければいけなくなってしまうのではないかと心配いたします。

金鉉球　もう一つ申し上げたいと思います。濱田先生がおっしゃったことは論理的に妥当なお話です。根本的に両国間でこのような相違点があるものと考えていましたが、濱田先生や佐藤先生は、周囲のすべてのものを検討し、そこから『日本書紀』へ接近すべきだと言われました。ところが、なぜ日本の学界がそのような考えを持つようになったのかといえば、従来の『日本書紀』研究に対する反省からではないかと思われます。『日本書紀』を主体として史料批判することの限界性や、自らも少し納得できない内容があるというところから、結局、周囲の資料を研究してから『日本書紀』に接近しなければならないというような考えが日本学界に生まれたのではないでしょうか。

ところが、私は基本的に『日本書紀』に対する既存の批判部分は、根本的にも問題があるものではないかと考えます。ですから、周辺に対する論議よりも、まず基本的で根本的問題があるものに対して論議をすることが先決ではないかと思います。そういう意味で、個別の重要記事を一度検討する必要があると申し上げ、また、耳を傾けてもらいたいのです。

佐藤　濱田先生と金鉉球先生のお話で、日本と韓国における『日本書記』史料批判の違いのようなものが少し見えてきた気もします。ただし、何をもって根本的とか本質的とするかというのは難しい問題だと思っています。

私は、倭が朝鮮半島南部を経営していたはずだとも、倭が朝鮮半島南部を経営していたら困るとも思っていません。そういう先入観ではなく歴史の事実を知りたいのです。石井先生の意見と同じく、私も自分の周りに神功紀 49 年条の記事をそのまま歴史的事実と見る研究者はあまりいないと考えます。神功皇后の伝承全体の中でとらえる必要はあるかもしれませんが、史料批判をせずそのまま使うわけにはいかない史料だと思っています。ただし、それを先入観で

判断するのではなく史料批判するためには、出土史料や考古資料など、史料批判するための新しい歴史史料・材料がなければ批判はできないのではないでしょうか。ただ、そうした他の材料がなくても『日本書紀』の編纂過程を相対化して見ていくことは可能だと思いますが。しかし、それもすでにかなりのところまでは研究されているのかなという気がいたしますので、そういう意味で、この 49 年条についての史料批判をどこまで進められるかというのは、まだまだ課題ではないかと私は思います。ですから、金泰植先生の三番目の論題「4 世紀韓日関係の全体の基本的在り方」の中で、もう一度この記事を見直すべきではないかなというふうに思っております。

倭軍の性格について

盧重国　それでは、二番目の主題である広開土王陵碑文に書かれている倭軍の性格ということについて、金泰植先生の発題文を見ながら意見交換をしたいと思います。

金泰植　倭軍の性格について、「当時の倭軍は朝鮮半島南部の侵略を願いながらも完遂できない作戦中の軍隊だった」というのが濱田先生の意見ではないかと先ほど申し上げたのですが、濱田先生、それでよろしいでしょうか。

濱田　私は倭軍の性格づけについて、これまで具体的に発言したことはありません。むしろそのように韓国側は私の見解をとらえているのでしょうね。

盧重国　そのような表現は使っていないのですね。碑文に見られる倭軍の性格に対し、ほかの先生方はどのように考えていらっしゃるのでしょうか。

主体は倭か百済か

金鉉球　午前の話し合いでも接近方法に関して異論が多かったのですが、広開土大王碑文中の倭についても接近方法を既存の考え方から少し変えてみたいと思います。

例えば、辛卯年条などはさまざまな解釈の余地があるため、あれこれと論議しても結論は出ないと考えますので、そういう面では全く異議はありません。

それとは別に最も重要な記事が、404 年条の「倭が帯方界を侵略した」という記事だと考えます。私は日韓中の倭に関する記事の中で 404 年条が最も信頼できると思っていますので、それについては全く異論ありません。前に申し上げたように、地理的に見てここに見られる倭は、海を越え加耶・百済を越えて帯方界までやってきたと考えられるので、加耶・百済・倭の三国が連合した軍隊だと思うのです。その場合、主体がどこであったかが問題ですが、倭を主体として見るには、海を越え加耶や百済を越えて高句麗と争わねばならなかった理由がよく分かりませんし、それ以前に加耶や百済を影響下に置いていたという記録が明らかではありません。これに対し、百済は倭を引き連れていたという記録があり、百済と高句麗は毎年戦っていたということですので、争う理由があったわけです。そういう意味で、百済が主体と見るのが妥当ではないかと考えます。

ただその場合には、百済が 404 年以前にいつ加耶と関係を持ったのかということが問題となりますが、それを示している唯一の記録が神功紀 49 年条だと思います。日本の立場から見たとき、高句麗と争う理由を置いておくとしても、加耶と百済を影響下に入れたという記事とし

て唯一のものが神功紀 49 年条です。加耶七国平定という言葉が合うか合わないかは別としても、記事の主体が百済であったのか倭であったのかを、一度論議することが大変重要だと私は思います。その主体が百済であるとすれば、広開土大王碑文404年条に見られるように百済側を引き連れていたことが明白になるのであり、そうではない場合には、主体が倭である可能性が高くなるためです。

金泰植　私も金鉉球先生の意見と同じです。しかし、神功紀 49 年条の記録よりも史料的信頼度が高いと思われるのが欽明紀だと思います。欽明紀には、聖王が「近肖古王代、加耶の幾つかの小国へ百済が使臣を送り兄弟関係を結んだ」と述べている記録が見られます。そのことから見ても、やはり神功紀49年条も百済と加耶が使臣交換を通じ関係を結んでいたという記事であり、その記事がどういうわけか主体が変わり、誇張されて載せられた記録が神功紀 49 年条であると私は判断しています。

濱田　金鉉球先生、404 年条というのは「倭、不軌にも帯方界に侵入す」という記事ですが、ここには倭が出てくるのであって百済や加羅（加耶）は出てきません。ここの主体が百済と読む根拠はどういう判断でしょうか。404 年条は倭が主体に書かれています。これをひっくり返すには相当な根拠を述べないと多くの人の理解を得られないと思いますが。

金鉉球　先ほど申し上げたように、倭が帯方まで行くためには加耶や百済地域を通らずには行けません。行くことができたということは、三国の協力した軍隊だと見るのが妥当ではないでしょうか。ただ、倭が主体であるように広開土大王碑文に書かれているのは事実ですが、それは高句麗の立場から倭を強く浮き彫りにしようとしたのでしょう。基本的にはこの三国が協力した軍隊であると私は考えています。そのことをさらに裏付けてくれるのが「399 年、百済が倭を引き連れた」とする内容ではないかと思います。

佐藤　今の部分の解釈はいろいろと難しいと思いますが、広開土王陵碑文の第３面の第３行の「十四年甲辰……倭、不軌にも帯方界に侵入す」と濱田先生が読まれたように、「不軌にも」と書いてあるので、高句麗は倭が順当に来たとは思ってないと考えます。百済が来たのならば高句麗にとっては当然のことですので「不軌にも来た」という感じではありません。倭の実態が連合軍かどうかは分かりませんが、倭が来るはずはないのに来たということで「不軌にも」という表現が入ったと思うのですが、いかがでしょうか。

金鉉球　私は佐藤先生のまさにその発言こそが、主体が百済であったことを示すものではないかと考えております。高句麗の立場から見ると、百済が来ることは当然であり、そこに倭が加わって来たために、逆に倭を浮き彫りにしたのではないかと思うのです。

盧重国　私は少し違う角度から見ています。実際、碑文には読めない文字が多いため、さまざまな解釈ができます。ただ４世紀後半から５世紀はじめの朝鮮半島の状況を示すのは、この碑文以外にも『三国史記』と『魏書』百済伝があります。『三国史記』は、この時期の対外関係を高句麗と百済が二大軸をなして対決する構図で描いています。『魏書』百済伝でも、百済と高句麗が中心軸をなし対立すると出てきます。このような状況を踏まえて碑文を見ると、高句麗と争う主体は百済であることが明らかなのではないでしょうか。そうすると、碑文に見られる倭は、百済を助けに来た支援軍のような形態だと見ることが可能ではないかと思います。

金鉉球　私の三国連合軍であるとする意見に対し、先ほどの佐藤先生の「倭が不軌にも帯方界に侵入

した」という表現は、倭が単独軍隊だったという意味に受け取られるのですが、その倭が加耶と百済を経て帯方まで来るということは、加耶や百済を影響下に置いていたという意味だと受け取っても良いでしょうか。

佐藤　その点は、この碑文を読み込まれた濱田先生のご意見を聞きたいと思います。ただ「倭が不軌にも帯方界に侵入した」という書き方は、高句麗の当時の認識として書かれた文章の読み方では「倭がやって来た」ということであり、それが連合軍かどうかは書かれていないわけです。もし百済が連合していたならば、なぜ399年のように「百済と倭が一緒に来た」と書かなかったのかを問題にするべきです。ですから、広開土王陵碑文の史料批判をまずしなければならないのであって、なぜこのように書かれたのかということから確定するべきではないかと思っております。

濱田　戦争時においては、百済にとっては百済が主体であり、倭にとっては倭が主体なのです。玄海灘を渡って加耶・百済を過ぎて帯方界まで行くというのは主体そのものですし、それぞれの立場で主体意識を持っているのです。それぞれの立場で戦争を回顧して記録というものができるわけですから、どちらが主体かというのを判断するのはなかなか難しいと思います。

金鉉球　濱田先生のご意見はごもっともで、百済の立場から見れば百済が主体であり、日本の立場から見れば日本が主体だと言うことができます。

しかし、戦争という基本的性格から見た場合、ある国は基本的な性格に応じて戦争に参与し、ある国は付随的に参与するというような問題が存在するのではないかと思います。百済の立場は比較的に明確ですが、日本の立場は明確には見えないのです。つまり、日本が主体だとすると、その戦争はどういう性格のものだったのか、または参与した日本の目的が何であったのか、私はその部分が気に掛かります。濱田先生、その部分を少し説明してくださるとありがたいと思います。

濱田　碑文そのものは高句麗の立場で書いているのですが、碑文の構成は「高句麗と百済の戦争」ではなく「高句麗と倭の戦争」というふうになっており、倭を主体に書いていますね。しかし現実は、４世紀のはじめから高句麗と直に対立して厳しい状況にあったのは百済や新羅であり、倭との衝突は両者の間に百済・新羅がありますから、やや間接的でした。ところが碑文は、高句麗と倭の対立の中で動揺する苦しい百済と新羅という設定になっています。

『三国史記』には、倭が慶州を襲うという記事が４世紀と３世紀の間だけ出てきますが、これを荒唐無稽と切り捨ててしまえるのかということも、実はこの碑文問題あるいは古代日韓関係を考える場合の一つのポイントになると考えます。

盧重国　碑文全体から見て、396年丙申年条から400年条までの争いは、基本的に高句麗と百済中心の争いであったと理解してもよいかと思います。それは、399年に百済が倭と和同した後その争いが起こったためです。その延長線上で404年の記事を解釈しても可能ではないかと思います。それを傍証するのが『魏書』百済伝と『三国史記』に見られる高句麗と百済との熾烈な戦闘だったと見ることができます。

石井　前回の全体会における発表も踏まえて本日の問題提起を聞いておりますと、碑文に書かれている倭の実態は百済であるとか、あるいは百済の援兵であるというような解釈が金泰植先生の基本的なお考えでしょうか。まずそのことを確認しまして次の質問に入りたいと思います。

金泰植　やはり百済と加耶を助けるために来た援軍であると考えます。

石井　倭というものの実態が援軍であるとするならば、表現にもう少し工夫がなされるのではないかというのが一番の疑問です。援軍とはいえ当然その主体となるのは百済の軍隊で、それを助けるのが倭です。そうすると、百済が表に立って表記されるのが普通ではないかと思いますが、その点はいかがでしょうか。付け加えますと、高句麗が「百済」と書かずに「倭」と表記する理由、その背景はどのように理解すればよろしいでしょうか。

金泰植　当時の百済は、広開土王が即位する直前まで高句麗を大変苦しめ、即位直前には高句麗王であり広開土王の祖父に当たる故国原王を戦死させるほど大変強力な軍隊でありました。しかし、広開土王が即位した後は形勢が高句麗に有利に展開し、高句麗は百済に対し全面攻撃をしました。実際このような戦争は、百済本土の北部地域、百済の援軍であったと見られる加耶地域、またさまざまな箇所で起きました。

このような中で突然予期もせず倭軍が現れたのです。もともと高句麗は百済に対して強い警戒心がありましたし、その上大変な遠方の知らない地域から来た倭軍に対しても警戒心を持っていたため、倭軍を全面に立てるようになったのです。

また、広開土王陵碑文というのは高句麗人に見せるための碑文であるために、百済のみならず、さまざまな地域から来た異民族たちまで相手にしたということを誇示するという内部的な目的から、倭軍をより全面に出した可能性もあると思います。

盧重国　このように考えてはいかがでしょうか。碑文によると高句麗が直接攻撃した対象は、碑麗・粛慎・東扶余・百済の四国です。そのうち碑麗・東扶余・粛慎は戦争の主体として明記されており、その三国の争いは高句麗軍と各軍個別の争いでした。しかし、高句麗と百済の争いには、時には倭軍も含まれ加耶軍も含まれていましたので、他の三国との争いとは若干違う様相を見せています。すなわち、百済軍の中に別の倭軍が入っているために、それがより強調され碑文に含まれたのではないかと考えます。

金鉉球　先ほど私の質問に対しての濱田先生からのお答えをいただいておりませんので、今一度お伺いします。主体が倭であるようになっているのですが、倭が高句麗と争った理由を私はよく説明ができませんので、もし普段お考えになっていることがありましたら、お話しいただければありがたいと思います。

濱田　私は、主体をどちらか一つとは見てなくて、共に主体であるという見方もできると思います。高句麗の南下、あるいは百済との激しい戦いというのは、倭から見ても自らの危機としてとらえられたのではないかと見るわけです。

もう一つは、碑文における倭の評価というのは近年非常に高くて、碑文にこう書いているけれどもそのようには解釈しないという説は、まだ十分な説得力はないという状況です。

石井　倭の五王である武が上表文で宋に対して高句麗遠征を願い出ている。あるいは意欲を述べている。そのことこそが今の問題について考える一つの材料になるのではないでしょうか。

金鉉球　石井先生や濱田先生の今までお話を総合しますと、倭が帯方界に攻め入ったのは、高句麗が百済を侵略することに対する危機意識を持ったからだと理解なさっていると思われます。ところが、高句麗が百済を侵略することに対して倭が危機意識を感じた理由は、倭が加耶地域を占領していたか、そうでなければ日本まで攻め込んでくると考えたかという二つのうちの一つで

はないでしょうか。私が考えるところ、濱田先生は高句麗が当時日本まで攻め込もうと考えたとは思っていらっしゃらないようですが、そうであるなら倭が加耶に影響力を持っていたという話となり、それこそが今まで話してきた朝鮮半島南部経営論と同じ話ではないかと考えるのですが。

石井　百済や加耶が高句麗の南下に対して危機意識を感じていたように、倭としても、加耶を占領していた、していないにかかわらず危機意識を感じていたと十分理解できるのではないでしょうか。倭に直接高句麗の力が及んでいるというのではなくて、高句麗の南下により朝鮮半島において起こっている現状を踏まえた危機意識から、宋の力を借りて高句麗遠征を行いたいと武は上表文に述べているのだと思います。先ほどお昼休みに話題になった、７世紀の百済・高句麗・滅亡直前の新羅、そして日本の対応というものを想定すると、よく似た状況というものが考えられるのではないかと思います。百済や高句麗が滅亡すると、直接、唐の力が日本に及んでくるだろうという想定のもとで対策を練っている。ですからそれと似たようなことで、直接日本が百済を占領下においているという状態を想定しなくても、十分高句麗と戦う意味はあったのだろうと私は考えております。

濱田　午前中にも佐藤先生や私が述べたのですが、やはり概念の問題で、先生がストレートに「倭が加耶を侵略していた」という説に結び付けられるのではないかという批判もありました。百済や加耶あるいは倭の間には、侵略とか援軍とか同盟といった今日的な国際関係の概念とも違う、運命共同体のような何か別の関係があったのではないかという考えが一方にはあるのです。倭が加耶の地域でそういった華々しい戦いをしたというような考古学的な遺物、出土遺跡などは確認できないのではないかと思います。